

神経眼科学を学ぶ人のために

三村 治 著

日本広しといえども、神経眼科の大看板を掲げた主任教授のいる教室は、現在兵庫医科大学しかない。その人、三村治教授が八年をかけて渾身の神経眼科学の教科書を上梓した。

視覚は眼球だけでは成り立たない。対象物に視線を合わせて明視するという瞬時の作業は脳と眼球の共働で行われ、このときに、眼球運動、調節や瞳孔の運動が生じている。こうして適切に網膜に入力された視覚信号は視路を経て、大脳皮質視覚領に到達し、さらに高次脳へ至って情報処理される。神経眼科とは眼球そのものだけでなく、それと共働作業をしている大脳皮質や脳幹、小脳も含めた視圏で、視覚に関する生理、病理を捉える学問で、その源は20世紀前半にある。その後の一世紀の間に、神経学を支える学問群の目覚ましい進歩とともに、神経眼科はおびただしい臨床経験をした。三村教授は、日本の神経眼科学の草創期メンバーである井街謙、下奥仁兵庫医大両教授の下に学び、1998年に第3代教授に就任した。この経歴からも、日本で最も豊富な神経眼科の臨床経験を有した現役医師かつ教育者であることが知れる。

本書はこうした背景の中で著された集大成で、今日の臨床神経眼科学の一つの到達点を示した歴史的著書といってもよいだろう。しかも単著である。単著は多数の著者による共著がどうしても統一性に欠け、時に専門的すぎたり、重複や欠如項目が出やすい弱点があったりすることからも、読者としては望ましい形である。ただ、広い範囲を一人だけでカバーしなければならない単著は、その重圧と費やされる時間の膨大さから避けたいのが人情である。それをやっつけた三村氏にまず敬意を表したい。

最近はず数を減らしイラストなどで目に訴える手軽な教科書が好まれるあまり、通り一遍の説明に終わり、深みが追及されていない書が多い。そんな中で本書は、読みやすい簡潔な記述法を用いながらも、新しい情報にも十分意を払った一冊になっている。例えば抗アクアポリン4抗体陽性視神経炎や鼻側視神経低形成に独立した項目を与えたり、最近次々と発見されている眼底所見の乏しい網膜疾患を「視神経疾患と間違えやすい網膜疾患」として取り上げたりしているところなど、類書には見られない慧眼である。

しかし、三村氏の永年の臨床経験の成果が最も顕著に表れているのは、「眼瞼痙攣」「甲状腺眼症」「重症筋無力症」の三項目であろう。それぞれの疾患に、5, 7, 9ページを割き、文献的記載だけでなく、症例を多数診てきた者でなければ気付かない内容が含まれ本書を特長付けている。この三項目は眼科医がもっと理解を進め、積極的に扱うべき疾患だと評者もずっと思ってきただけに、わが意を得たりである。

神経眼科に関心のある眼科医、神経内科医、脳外科医らにとっては、座右に置いて大いに価値のある書である。神経眼科の問題は、眼科臨床の中に平気でずけずけと入り込んでくるので、厄介に思う眼科医も多いようだが、本書を読めばそれは杞憂に帰し、むしろ臨床の幅も深さも増すことになろう。そういう意味では、とりわけ一般眼科医にお勧めしたい一冊である。

井上眼科病院・名誉院長 若倉雅登

B5 頁288 2014年

定価：本体9,000円＋税

[ISBN978-4-260-02022-0] 医学書院刊